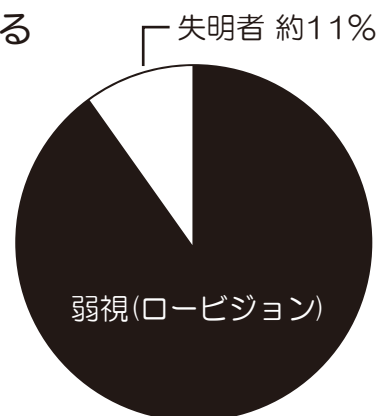




# 視覚障がいについて

視覚障がいとは、視力・視野に障がいがあり、日常生活に支障を来す状態のことを視覚障がいといいます。視覚障がいの見え方は、視覚情報のある程度使える「弱視者 (low vision)」と、視覚情報をほぼもたない「全盲 (blindness)」とに分かれ、2007年の日本眼科医学研究班の報告によれば、視覚障がいの割合は全国で約164万人。このうち失明者は、全体の約11%。視覚障がいの約9割が弱視です。



視覚障がい者 全国約164万人の見え方の割合  
参考：日本眼科医学研究班報告（2007）

## 弱視者について

世界保健機関(WHO)のロービジョンの定義は、「両眼に眼鏡をかけた矯正視力が0.05以上0.3未満」となっていますが、弱視者の見え方は個々により見え方がことなり、視力低下のほか、視野異常、羞明\*しゅうめいなどがあります。弱視者は「見えづらい」状況の中、自分の残った視機能を活用しながら生活をしています。

\*しゅうめい  
羞明：光に対して過敏になり、まぶしく感じてしまう状態です。逆に暗くてものがよく見えないという状態もあります。

【正常】



【視野10度】



【視野5度】



【中心暗点】



その他の見え方例

【霧のように白く見える】



【右目が見えず、左目は濃淡が近いものは同じ色に見える】



【物が二重・三重に見える】





# 視覚障がい者サッカーについて

視覚障がい者サッカーの競技は2種類あります。  
フットサル(5人制サッカー)を基にルールが考案されており、障がいの程度によって、3つのカテゴリーに分かれます。

## 障がいの程度(カテゴリー)

B1: 全盲から光覚まで →ブラインドサッカー

B2: 矯正後診断で視力0.03まで、ないし、視野5度まで

B3: 矯正後診断で視力0.1まで、ないし、視野20度まで →ロービジョンフットサル

※国際大会で開幕直前に視力検査を行い、当該選手のみがプレーすることができます。  
なお、国内大会で普及を目的に健常者もピッチ上人数を制限して、視覚障がい者とともにプレーできるようにしています。

## ブラインドサッカー(B1クラス)

アイマスクを着用した4人のフィールドプレイヤー(全盲)と、ゴールキーパーは晴眼者もしくは弱視者がプレーします。  
ブラインドサッカーでは、下記などの独特ルールがあります。



© 2017 JBFA All Rights Reserved

### ■音が出るボール■

フットサルボールと同じ大きさで、音が出る特別なボールを使用します。

### ■「ボイ!」■

フィールドプレイヤーがボールを持った相手に向かって行く時に、「ボイ!」と声を出さなければなりません。発しないとファールを取られます。

### ■晴眼者の協力■

敵陣ゴール裏に「ガイド(コーラー)」と呼ばれる人が立ち、シュートなどのタイミングを支持します。

## ロービジョンフットサル(B2-B3クラス)

弱視選手が主にプレーします。

ロービジョンフットサルは、アイマスクを装着しません。

弱視者が弱視状態のまま、フットサルとほぼ変わらないルールでプレーします。

ボールも通常のフットサルボールを用います。

参考:NPO 法人日本ブラインドサッカー協会



# ロービジョンフットサルの役割と現状

視力が弱い・視野が狭い状態の弱視者は考え方を変わると、「視力や視野が少しでも残っている状態」ととれます。

人は視覚からおおよそ8割の情報を得ており、その視覚に制限のあるロービジョンの子どもたちは、安全性の確保からスポーツへの参加に制限がかかったり、接触のあるスポーツを避けていることがあります。

ロービジョンフットサルは、健常者のフットサルとほとんど同じルールであり、プレーヤーの視機能と工夫を最大限に活かすことが求められるスポーツだと考えています。健常者と同じような環境の中で自分の可能性を発見し、自信や目標をもち、いきいきと生きていく環境を作ることが大切であり必要と考えています。

## よりよく見る工夫

(目を動かす・首を動かす など)

## 情報入手 手段の確保

(スキルアップのための情報収集 など)

## 視覚以外の感覚の活用

(声を掛け合う など)

## 視覚障害者同士の情報交換

(関連団体、患者交流会 など)

## ロービジョンフットサルの現状

現在、ブラインドサッカーの国内チームは20チーム前後あり、北日本・東日本・西日本、3地域でリーグ戦を開催しているのに対し、ロービジョンフットサルは、国内チームはわずか3チームです。

ブラインドサッカーに関しては、2014年に東京で行われた IBSA ブラインドサッカー世界選手権 の開催や2020年東京パラリンピックの競技種目でもあるためメディアでも取り上げられることが多く、サッカーをあまり知らない方でもブラインドサッカーの知名度は上がっています。

一方、ロービジョンフットサルの方は、サッカー好きの方でも知名度は低く、パラリンピックの正式種目にもなっていません。メディアに取り上げられることも少ないため、視覚障がい者サッカー イコール ブラインドサッカーの印象になっています。